y

まちづくりニュース

259号
2023年5月27日

常盤台の景観を守る会
常盤台まちづくり委員会

事務局　島田晴子　　tel・fax　3960 - 3869

ホームページ
https://tokiwadai.net/

― 都心低空飛行問題について ―

○ 羽田訴訟　進行協議のみ

5月16日に行われました。

5月24日に衆議院議員会館で羽田問題に関わる議員連盟が国交省5，6人を招いてレクチュアを開きました。議員は他の会議が重なり、海江田氏・松原氏など3名のみ出席、市民も30名参加しました。

3月の氷塊落下に絞ってみると以下のとおり。（　）内は参加者の胸の内です。

Q　3月13日渋谷区での氷塊落下について詳しい調査はおこなったか。

A　相当すると思われる機を点検したが何も異常が認められなかったので調査の必要はないと判断した。
（点検は当日ではなく翌日行ったので、氷の付着など確認されようがないのに･･･）

Q　どこでギアダウン（脚下げ）したのか。

A　氷塊が飛行機由来ではないので調査の必要がない。
（東京都上空を飛ぶ新航路では、従来海上で出していた脚を人口密集地上空で行うしかなく、雲などの気象条件によっては氷が車輪などに付着し、ギアダウンによってそれがはがれて落ちる事はよくあること。事故防止のためにも明らかにすべきでないか）

（調査しないのはどの便と明白になるのを恐れているから、としか思えませんでした。万一事故があった時、責任を取る覚悟があるのでしょうか。公務員の資格は？）

○ 図書館跡地はどうなる？

令和5年度に中央図書館跡地について決まると言われて数年間、誰しもコロナに振り回されている状況で、公共施設の再配置も大幅に遅れていることと推察していました。

そろそろ打診があっても良さそうなころですが、何か決まったとか検討中とかアンケート調査やワークショップの実施などの動きもありません。何事も上層部で決めてしまってから「丁寧な説明」で通されてはかないません。

民主主義が果たしてこの板橋区に浸透しているのか、見届けねばならないと思います。

○「ときわ台景観ガイドライン」（2007年成立運用）成立当時の記入から

ガイドライン案を拝見して･･･

いまこの案を実行させないと現状のままの美しいときわ台は消滅してしまいます。ひと昔（30年）前にも有志の方々が旗あげをして努力しましたがままならなかった。その後みどりの屋敷町は徐々にくずれ出し空き地が目立ちはじめマンションが立ちならぶようになりました。残念である。私はこのときわ台の街にきて76年前の企画に驚きました。欧米のガーデンシティに似ておりクルドサックの様式を取り入れた街であった爲にこの街が気に入り学生時代から今日まで一歩もときわ台からぬけだすことができなかった。丁度50年。板橋区内でほこれる街である。どこにでもある住宅地ではないのである。是非もう一度ときわ台の街をみなおし住民にアピールして下さい。勝手なことを記しましたことをお許し下さい。かげながら応援をいたします。　　一丁目在住人より

（お名前は不明。ご高齢のはずです）

常盤台に対する外部からの視点②

前回の視点①に続き、常盤台住宅地がどういった視点で論文に取り上げられているのか簡単にまとめていきます。

戦前、東京都内には民間が開発した住宅地がいくつかあります。（前回書くべきでした…）こういった計画的郊外住宅地のうち、住民活動が活発な地域として、田園調布、常盤台、国立、成城、玉川学園、桜新町などがあげられます。

これらの町が同様に抱える住環境に関する変容や問題があります。これを分析するための比較基準として、前回取り上げた「住民活動」、「敷地変化」というテーマのほか空間計画や開発経緯などがあります。

●住民活動の始まり

常盤台に関する論文でほぼ必ず取り上げられる住民団体は「常盤台郷会」です。

この団体は治安問題をきっかけに常盤台住宅地開発から二年後の昭和十三年に設立されました。

当初の常盤台の住民層に会社役員・会社員の者が多く、市町村常会の運営基準が法（昭和十五年隣組強化法）によって定められる前にも関わらず、非常に詳細な規約に則り運営されていたことが常盤台住宅物語（板橋区教育委員会、一九九九年p112、p114）より分かります。

さらには、当時の住民の大多数が会員であり、受け入れられていたと考えられます。

活動内容は治安維持や町内の管理のみならず、地域住民の交流（運動会・趣味ごとのグループの催し）なども行われていました。

●住民活動の視点

この常盤台郷会が現在の常盤台の住民活動の根幹であるため、常盤台を分析する人々によって取り上げられました。

計画的郊外住宅地の住民活動による景観・住環境維持の一例として、「常盤台郷会の意思・活動が現在の常盤台において、どの様な影響を及ぼしたのか？」といった視点で分析されているものが多く見受けられます。

戦前の開発当初～平成初期に至るまでの常盤台の歴史を、非常によくまとめた論文として東大卒の阿南氏の修士論文があります。興味ある方はぜひ読んでみてください。

●常盤台の敷地変化

敷地変化に関しては、前述のように計画的郊外住宅地の変容と題して、常盤台を一例として取り上げ比較している論文が多くあります。

常盤台においては世代交代とともに転出世帯が増え大区画の維持が困難となり一九七〇年代から土地の細分化やミニ開発問題が増加したと言われています。

代表的な論文として、加藤氏、上薗氏、早坂氏の論文が挙げられます。敷地変化について、土地利用の状況の面積比や居住形態の割合などを経年的に分析されています。

敷地面積の需要、住環境に関する意識の変化などに触れ、関心の低い住民に知ってもらう機会を増やすべきとする筆者の意見が語られる論文もあります。

興味のある方は是非読んでみてください。

次号にも続きます。

W・T

常盤台公園のはなづくり

梅・桃・桜・チューリップ・アネモネ・芝桜・・・春を告げる花々が一段落しました。例年より半月ほど早く過ぎ去ったようでした。来年はどうなりますやら、地球の気象変動は人間のよほどの覚悟がないかぎり際限なく拡大していくのでしょうか。未来が恐ろしく思えます。

五月なのに真夏日が増えて行くのも不安です。本当の夏には冷房するのが常態となり、電力消費も上がる一方になることでしょう。

かといって発電目的であっても人間が制御できないと解っている原子力に頼るのは、大きな視野で見ればその場しのぎの愚かな処置です。過去の事故から人間は何を学んだのでしょうか。考えると不安材料ばかりです。

Hさんから頂いた皇帝ダリアの苗ですが、植えたあとTさんが棒を立てて保護してくれていたのですが、勢いよく出ていた芽がふたつもぎとられていました。後から新しい芽が出ると良いのですが。

三〇・三一日あたりに咲き残りのビオラを差し上げようと前号に書いたのですが、あいにくの雨続きで実行できそうにありません。区からの花苗も一日に来るのですが果たして植えられるか？